





下谷岡

武藏國風土記殘篇曰 豊嶋郡下谷岡貢鹿狹鬼狸山鵠

貢薯蕷松脂云云

五條天神宮

東叡山の葉の麓頼川氏の比あり

菅神の像の實

一坐

本朝醫道の祖神

北野天満宮を相殿とす

菅神の像の實

菑師

頼川智億の宅地

遷すべらる

菅神の像の實

の夜向

本神事を後行す

菑師の像の實

菅神の像の實

北國記行云 正月の末にさしけりし日の出に優遊しとてり此坐の社

五條天神と申すより折あり括する茅原を焼く

契りてをさしてさしけりし日の出の初草とてり此坐の社

宝王山常樂院

長福壽寺と号す

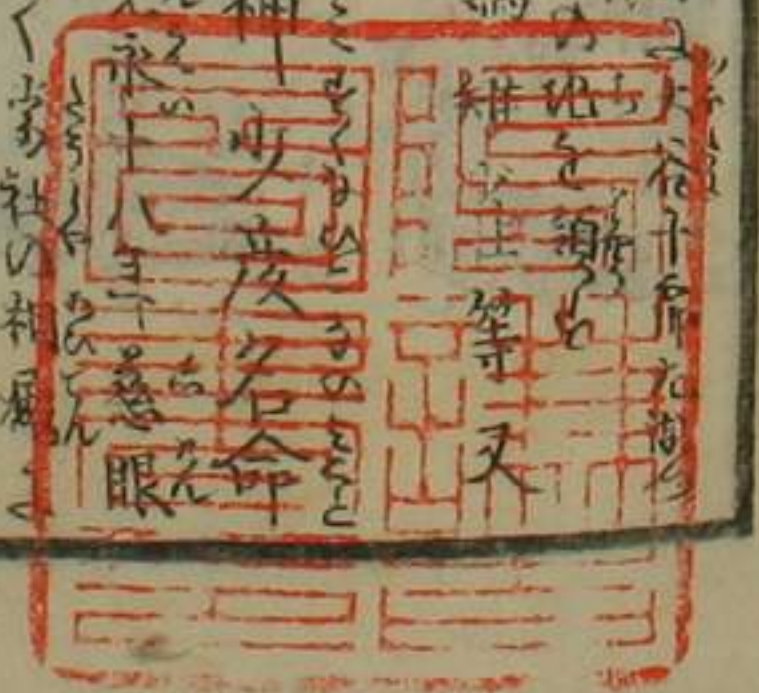
天台宗五條天神の南野川の向

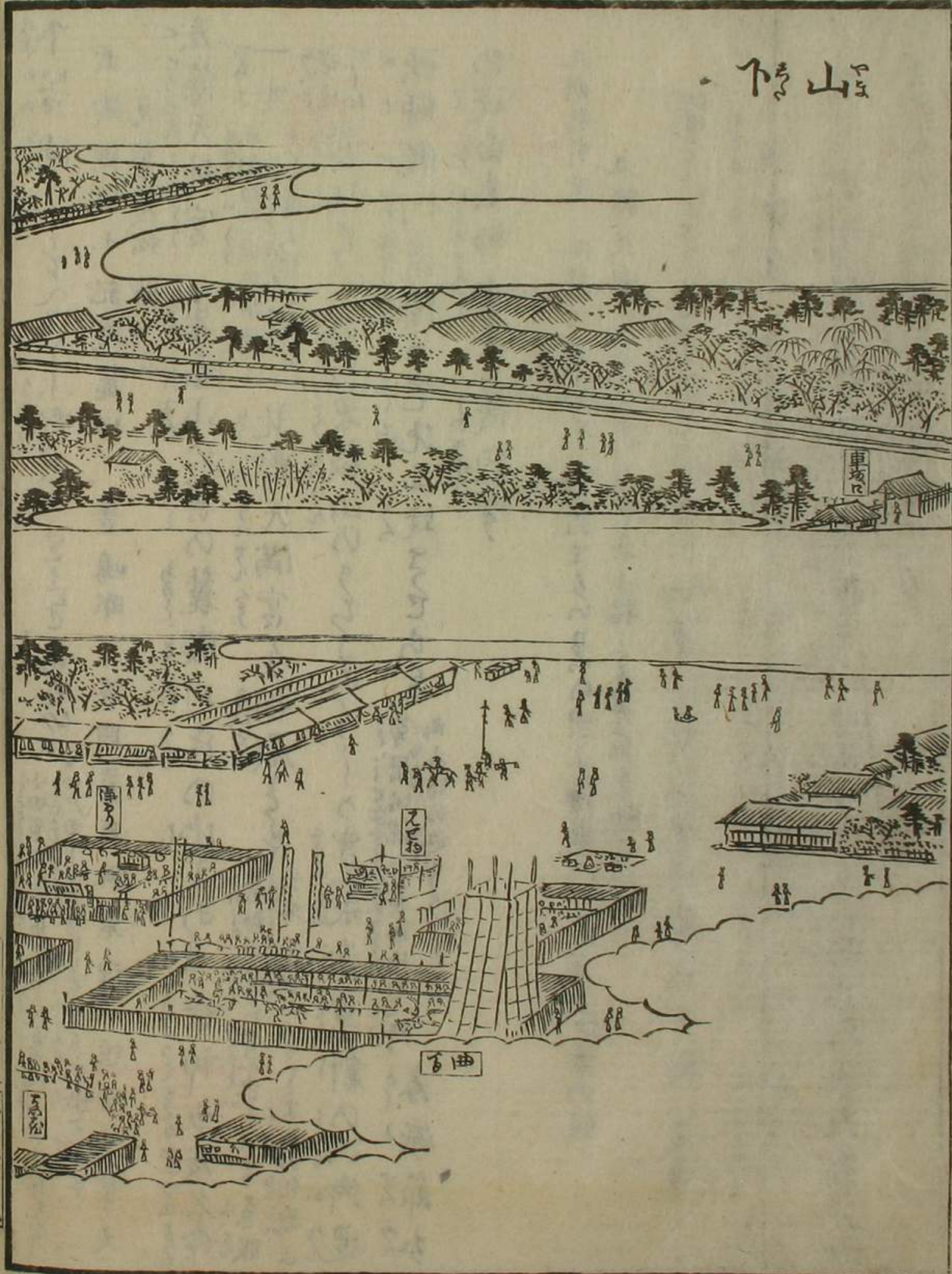
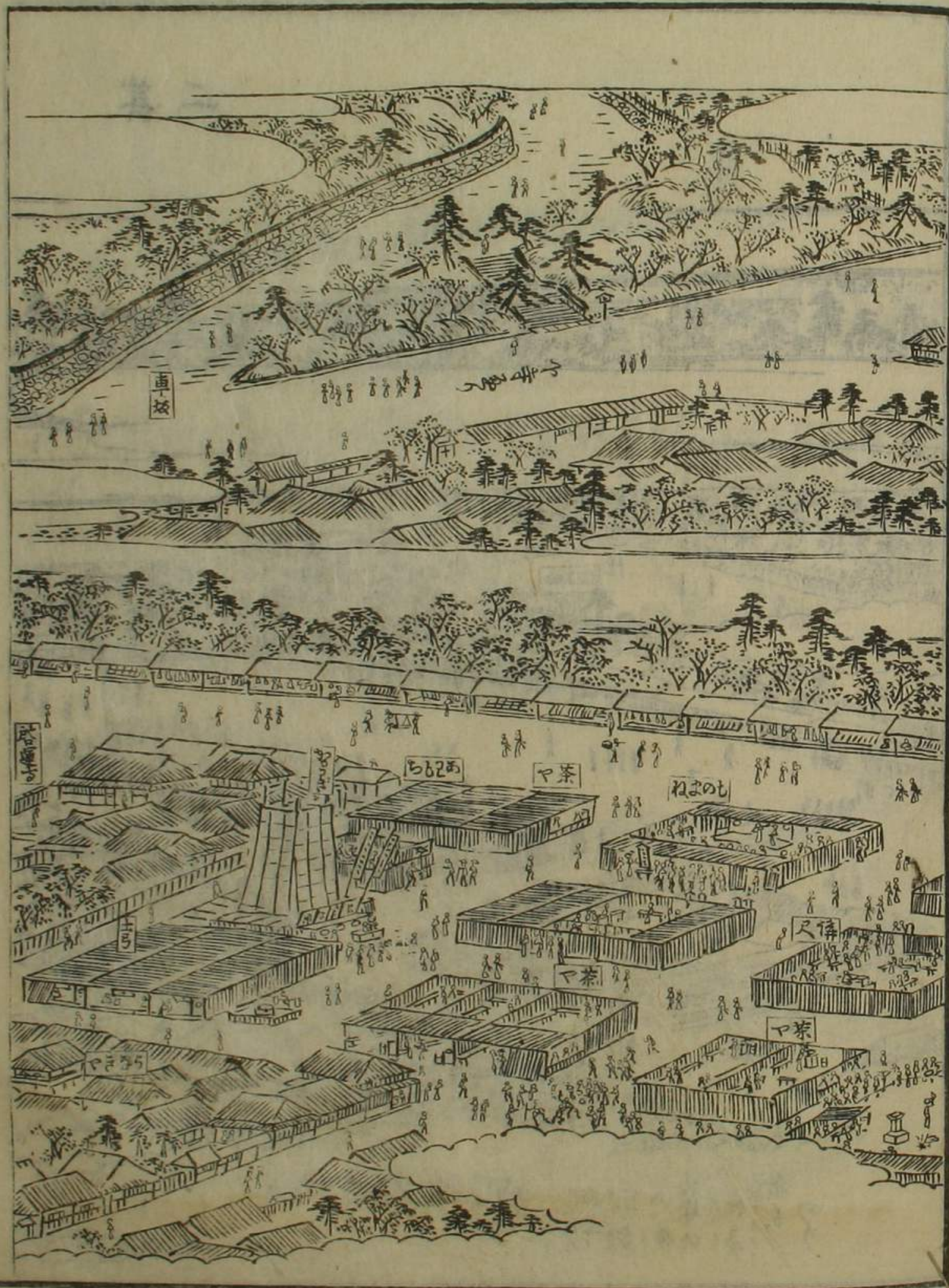
又あり

本寺阿弥陀如来の行基大士の作り

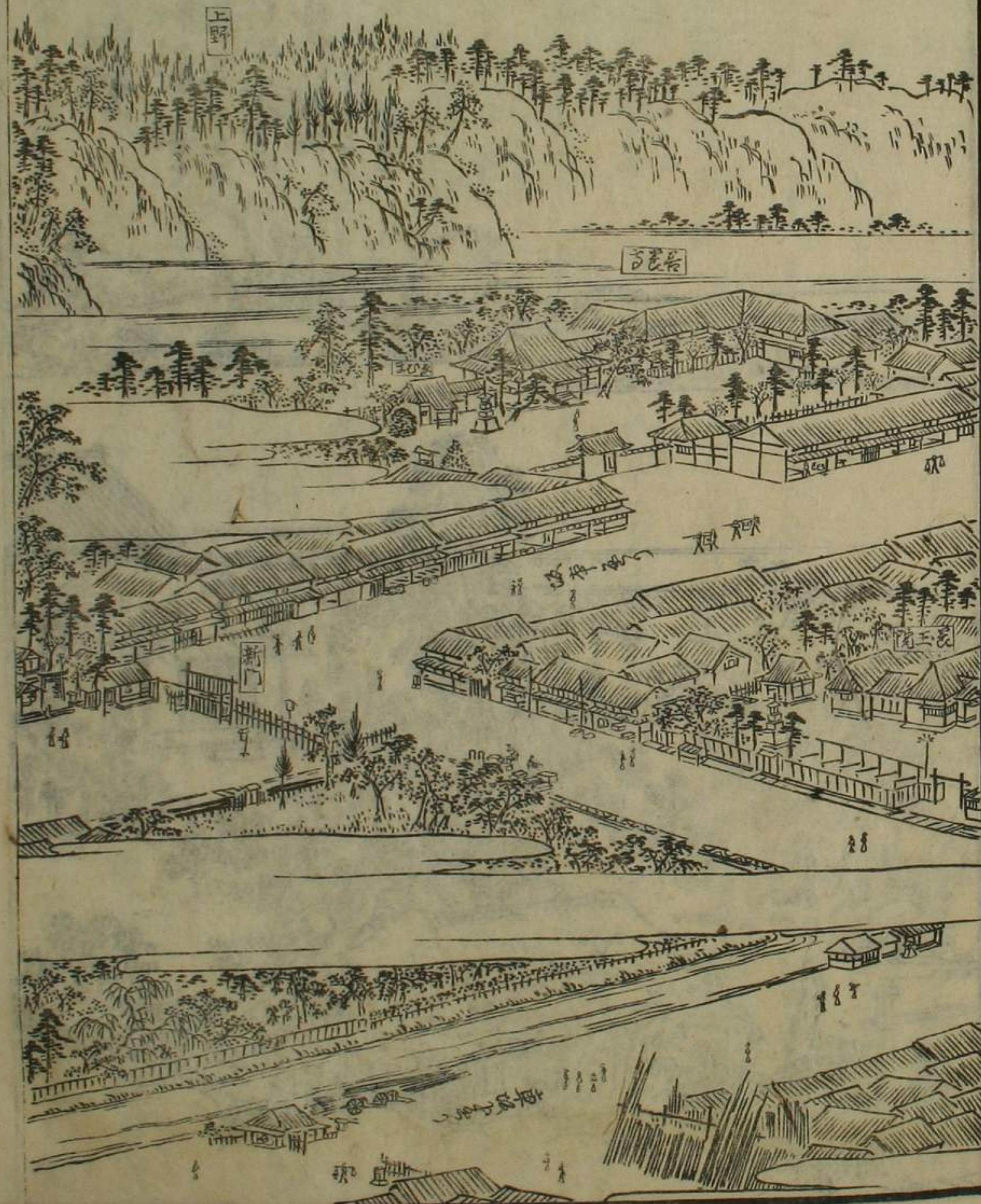
て西條院茅五番目

至二月八月の彼岸中甚賑なり



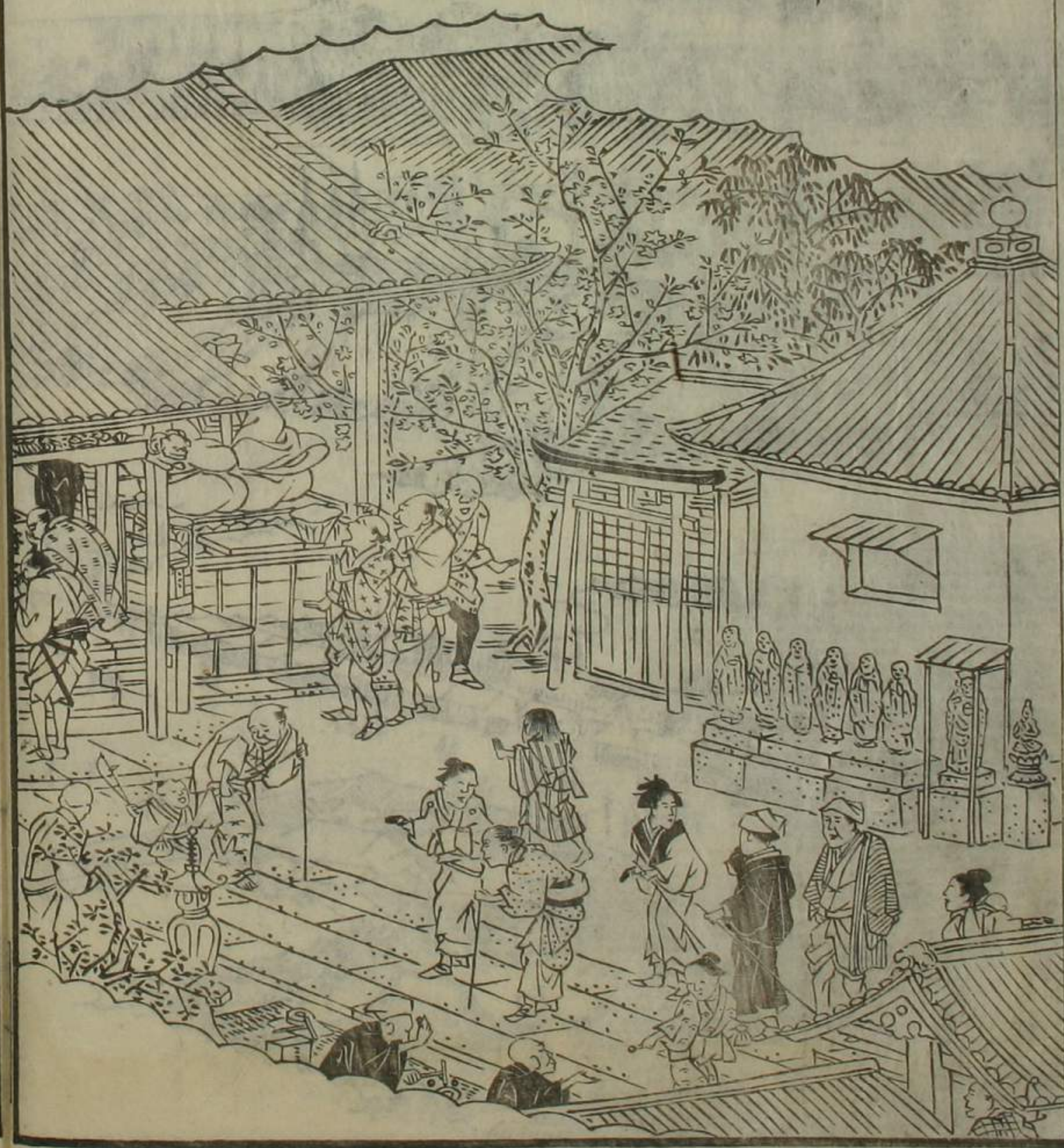


東麓山坂の平河



常樂院

六阿弥院五昔目
ありては秋二夜
の彼岸中振へり



入谷 庚申堂

喜宝院子母を
撰の天竺の
青面金剛と
因位の靈像



金光山 艮王院

下谷坂 奉壹丁目の南より天台宗より往昔の今の御境内大子の辺りよりと慶長の頃今の地に移りて往古の二藐院と号するを宝永年間今の名に改むるなり當寺は釋迦の涅槃像の画軸一幅を藏とよは慈眼大師の讚あり三國傳燈大僧正天海書とあるなり毎年二月十五日是日津よむ

藥王山 善養寺 延壽院と号す同石坂 奉壹丁目の左側より天台宗より奉尊の藥師如來を安と當寺は天長年中慈覺大師の草創奉修も田大師の作りといふ額に圓滿の二字を刻と黄壁本庵老人の筆の境内に圖魔堂あり圖玉の像の運慶の作り正月七月十六日奉詣集を或人云く當寺圖玉の像は神代學堂より小野照崎明神社 同所三丁目の右側より祭神奉儀小野管の靈なりといふ社傳あれとも詳れらむ故より思と當社の坂

小野照崎明神社 同所三丁目の右側より祭神奉儀小野管の靈なりといふ社傳あれとも詳れらむ故より思と當社の坂

奉の鎮守ありて八月十九日を以て祭日とて別當の天台宗ありて

小野山嶺松院と号す

或人云當社の其先皇の御宇に堂ありて頃その傍にありて小野の社と稱す小野の社と云ふ
儒教を崇めし所別是利と學子校を興く其後彼地にて寺を造りて傍にありて松院と稱す
或人云當社の其先皇の御宇に堂ありて頃その傍にありて小野の社と稱す小野の社と云ふ
儒教を崇めし所別是利と學子校を興く其後彼地にて寺を造りて傍にありて松院と稱す
或人云當社の其先皇の御宇に堂ありて頃その傍にありて小野の社と稱す小野の社と云ふ
儒教を崇めし所別是利と學子校を興く其後彼地にて寺を造りて傍にありて松院と稱す

佛迎山安樂寺

金松あり正保年中正蓮社意的和尚當寺を創

一心院の末より捨立一流の淨域たり晝夜不退念佛三昧あり

殊傍あり

寶鏡山圓光寺

根岸の里あり濟家の禪林あり釋迦如來を

奉すると當寺庭中小紫藤ありて花の頃ハ一奇觀たり其傍に倍

向あり孤松ありと稱す堂前ニ鏡の松と唱ふる名樹あり

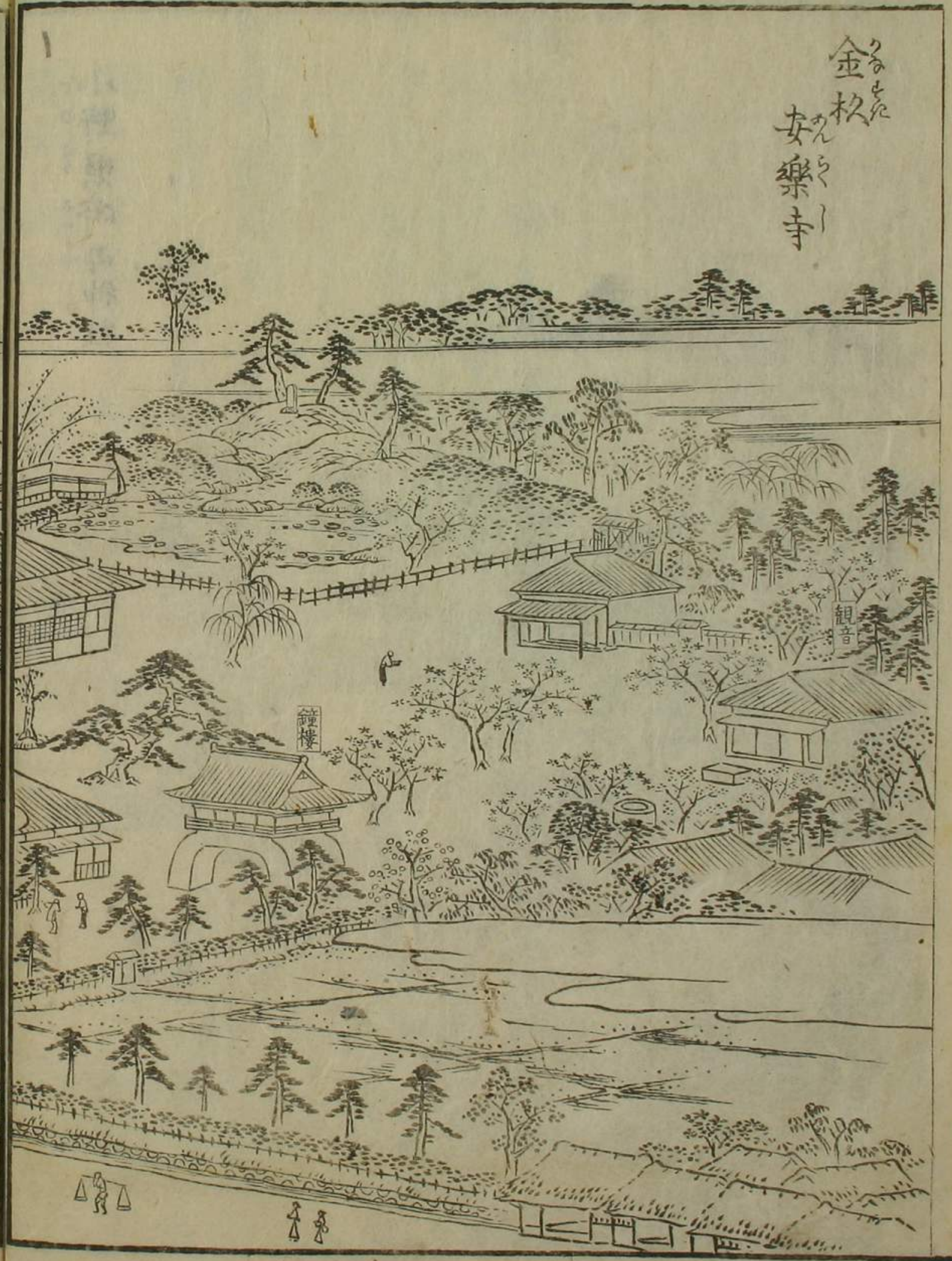
鎮守の辨財天弘法大師の作なりといふ

小野照崎神社





金松
安樂寺





根岸
圓光寺
世俗孫寺
といふ

庭申架と
穢らして是を
養ひし
孕のまゝ
二に尺よえて
花を最
麗美あり

時雨岡

田所庚申塚と云るより三四丁良の方小川は傍よりあり一株

の古松のりとは不動尊の草堂あり土人此松を御行の松と号す由の始くは省畧と一小時雨の松もよし

田圃雜記

多々の岡と云る所も松原のありある

霜の後あらはれふり雨をらむの岬の松もいれ

道真准后

按は岬の岬と云る東叡山の旧名なり此岬も東叡山より連綿たれり田圃雜記より出るとのれがの意を有て後世好事の人の号し

東陽山正燈寺

龍泉寺所あり

妙心寺流の禪刹

承應三年

年思堂和尚草創と

和尙大田宝鑑圓作と蓋乎と天性明敏して大に

當寺

の後園桐樹多し

其先山岬高雄山の桐樹の苗を栽と

晩秋の頃ハ詞人吟客さ小群遊

其紅艶を賞と

真贗山西光寺

兼輪新所あり

浄土宗

長和元年の草創

あり奉る阿弥陀如来ハ惠心僧都の作并山ハ蓮社賢譽上人たり

千束綱

龍泉寺所の辺今僅の地を

一ノ條場と字を菊岡

法涼の説は此地を依々律見の里とも号くとあり誤りとの境

叢祠あり千束稲と稱と

或人云住古の上と云れは浅草天正所の辺より子後の橋際迄をまゝと云ふ事と云ふは誤りなり仍て按は浅草寺五徳四年の鐘の銘は武島豊島郡子東の金龍山浅草寺とあり又同境内は西官稲と稱とあり里老傳へて是を上子束稲と号すと云ふ田原小茶太の右文書より子束の内は阿弥陀三尊の像を寺の地を左田原六郎同石原助の地を右田原六郎同金枝の地を右鎌倉正忠同近藤の地を島津孫七郎同朝倉合の地を江戸番匠等領と云と云たりと云ふ其地の廣大なることを云へ

本戸三河守源孝範茅宅舊跡

傳云今三河嶋と稱と

此の三河守居

住の舊跡あり好まき号と

或云此地の細言三河守といふ人の

孝範家集云 住の國と云ふ事なり那よ入にありたる不なり住と云ふはすべからずのやと云ふは誤りなり鹿の常はなまきり山をたれりめと云ふは誤りなり

曉のあけりしむするあけの子のあひふとらふをさるとすらん

返



元存れき
 吳竹の根卷の里ハ
 上所の山蔭ありて
 幽趣あり故や
 都下の遊人多くハ
 小隠棲之花
 あり常水不む
 陸もとのみち
 産すの其声
 ひとああり
 世に賞愛
 世に賞愛

いへる

時雨の岡
不動堂



田國雜記

霜の後

あつらふま

かり

時雨の

あひの

岡の

松も

あ

道真准后



正亭の燈寺の丹楓



庭中楓樹寂
抄わくく
晩秋の紅錦
海晏寺の園林
もも男の色あ
實一時的
奇観
た



山
熱谷
田明
神
社



駿馬塚



の時毛よる不の青海原とりの駿馬偶病してその小鬘を公大に思ふに
 傷とて朽骨を彈路の傍に埋めりしを其後里民小祠を營て
 建とて又近き頃其地ありし公の明徳を子歳の下は顯さん
 工を欲して塚の側より石碑を建て祠に其塚の東の方より
 飛鳥明神社 小塚原あり此地の産土神とて世人混して兼輪の
 天王と稱せり列歩あり聖護院宮ありて荊石山神と稱すと号す
 祭神大己貴命 日本紀古語拾遺等より大己貴命の
素盞鳴命の御子なりとあり 事代主命 古事記より事代主命の
大己貴命の御子なりと云
 二坐あり社傳曰往古延暦年中比叡の黒丸師東國化度の初此地に
 至る小小條の茂王なる一堆の小塚あり 此塚より此地を
小塚原と号せり 其塚より夜に
 瑞光を現し白衣を着たる二人の若刺棘生る石の上は降臨あり
 と黒丸師より告ぐと曰く我の素盞鳴命の和龜大己貴命なりと
 又一人の若刺棘を我の事代主命なりと 此神と号す
又云仍て忍教鶴
 仰し清浄の池を撰むて此神一社を奉すと 牛久保天皇の御孫六月二日
日九日す子住大橋の南傍



御子孫君を認り後承りしやま神幸ありと云ふ神祇の権靈天文十年辛丑六月三日此荒川一神靈
一基流れらるは石上り後此日と云ふ祭日と云ふと云り其神靈を奉揚し此今神靈と
又後石の赤根を昔は彼地は生し草草を用やりと
御子孫君を認り後承りしやま神幸ありと云ふ神祇の権靈天文十年辛丑六月三日此荒川一神靈
二社老翁子化し石上り後承りしやま神幸ありと云ふ神祇の権靈天文十年辛丑六月三日此荒川一神靈

豊徳山誓願寺 惠心院と号を花鳥明神の北にあり浄土宗あり

奉修の阿弥陀如未を安んじ基を惠心僧都あり

寺傳曰僧都顯密の二教を究め於諸宗を渡り遂に弥陀の本願

に帰入し往生要集等を著して大に自化を化せり

僧都上豆の慶祐法師と語りて曰く念佛の教いし東國に遊化し

を汝行く弘法と云ふなり仍慶祐法師命を受東國に遊化し

此地にあり當寺を建立せり 中古類破りを増上する

十八世了蓮社定養上人隨彼大和尚中真なり

戒の文と云ふなり學仏の後の教もなれりといひ傳のまこと記を其文と云ふ

惠心僧都勅依て泰内一林讚浄土経を侍講申されり威感のあり奉修の

御衣を賜りしに右御衣の四方へ御衣を授られし返りし是を榮と云ふ

此の登りては後承りしやま神幸ありと云ふ神祇の権靈天文十年辛丑六月三日此荒川一神靈

衣のうを授り奉りしに右御衣の四方へ御衣を授られし返りし是を榮と云ふ

養のひりてありそなたねたまは借さし唯命を限りし樹や石上のま草なり本

食の取を授りしに右御衣の四方へ御衣を授られし返りし是を榮と云ふ

名のなり祝法一利難の右の御布を授りしに右御衣の四方へ御衣を授られし返りし是を榮と云ふ

ありたりしに右御衣の四方へ御衣を授られし返りし是を榮と云ふ

われしに右御衣の四方へ御衣を授られし返りし是を榮と云ふ

されたりしに右御衣の四方へ御衣を授られし返りし是を榮と云ふ

あけたりしに右御衣の四方へ御衣を授られし返りし是を榮と云ふ

巴と云ふに右御衣の四方へ御衣を授られし返りし是を榮と云ふ

糸のこの勅定に右御衣の四方へ御衣を授られし返りし是を榮と云ふ

林讚浄土経講讀の御布を授りしに右御衣の四方へ御衣を授られし返りし是を榮と云ふ

ありて三途に右御衣の四方へ御衣を授られし返りし是を榮と云ふ

法修のありしに右御衣の四方へ御衣を授られし返りし是を榮と云ふ

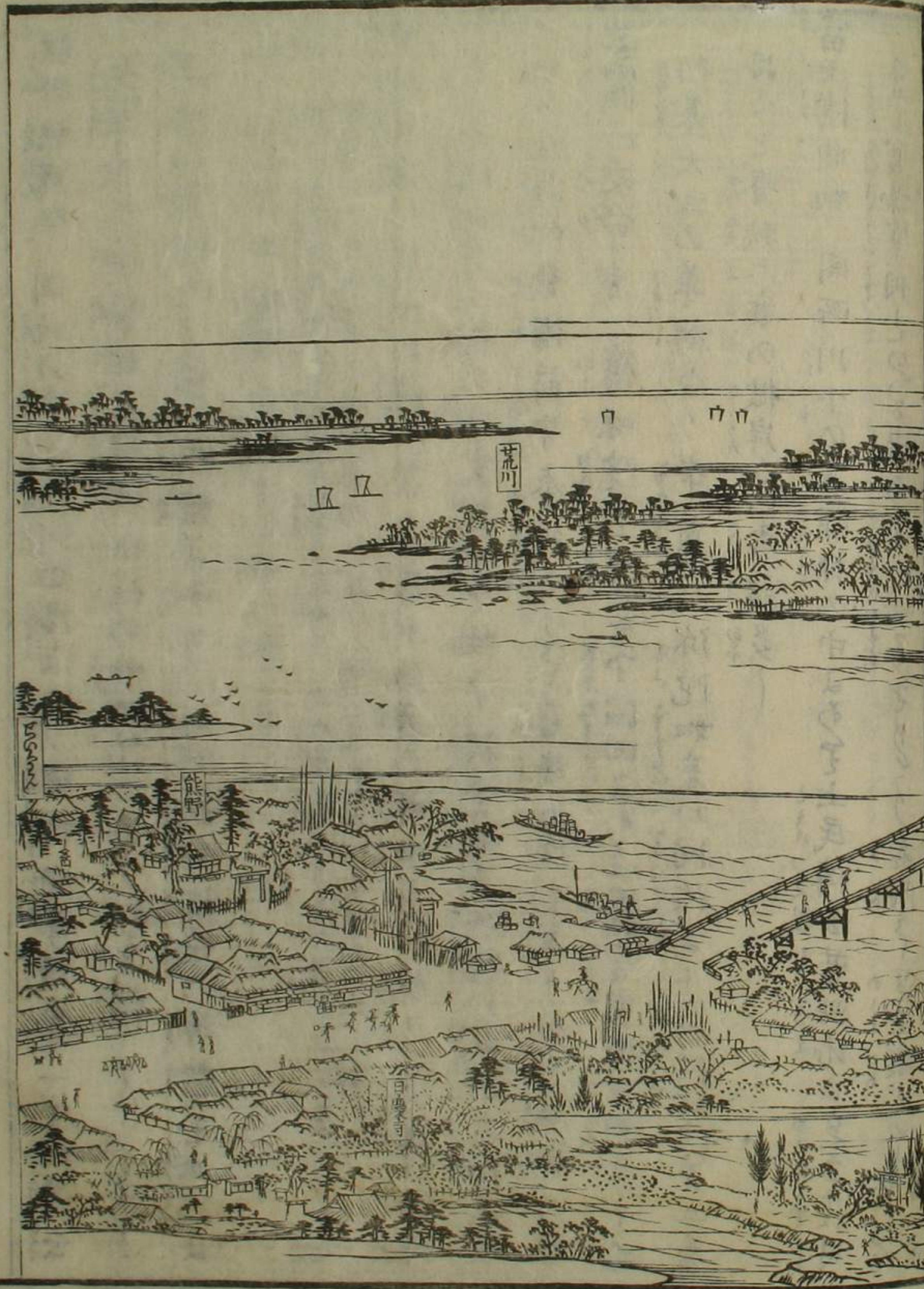
鳴呼自らありしに右御衣の四方へ御衣を授られし返りし是を榮と云ふ

要集と云ふに右御衣の四方へ御衣を授られし返りし是を榮と云ふ

りため利と云ふに右御衣の四方へ御衣を授られし返りし是を榮と云ふ

つらありしに右御衣の四方へ御衣を授られし返りし是を榮と云ふ

授れる物と云ふに右御衣の四方へ御衣を授られし返りし是を榮と云ふ



千住川
 荒川の流
 隅田川の上
 あり
 隅田川上流



千住大橋

熊野権現社 同北の方千住川の隈あり祭神伊弉册尊一坐社傳云

永承年中義家朝臣貞朝征伐の時此地より河を渡るととて

奇異の靈階ありなり鏡櫃と女に紀別熊野権現の神幣を此地に

とてめで熊野権現と稱してまつるなり
按て熊野権現鹿島明神也紀別は坐あり又此地は兩社の所謂なり今傳
記より詳なるを尋て余説を假しと欲しといふも其の事なり

千住大橋 荒川の流に架す貞朝海道の咽喉あり橋上の人馬の絡繹
とて向断あり橋の北壹貳町を經て寂舎あり此橋ハ其始文祿二年

甲午九月伊奈備前守奉行とて普請ありより今又連綿たり
甘露山延命寺 應味院と号して下沼田あり真言宗の古刹にして

行基大士の草創なり奉尊阿弥陀如來の同作ありて六門弥陀第一番
同とて春秋二度の彼岸より祭詣多し

富士浅間祠 同所川下の方深林の中あり土民傳云昔此地は足立莊司
あり宮城宰相といへる者あり一女子をとりて名附て足立姫といふ

才四番兩橋起るの豊島を傳つ爾時光の女ありて二番目橋起るの沼田の村の娘あり
三番目五番目とて六番目橋起るは足立後二位宰相藤原正成の女ありてあり

嶋屯御つ耐ありとあり者のりて一城をりて
縁起より沼田中浦のりて送りてあり三番目縁起
余本の海陸等の縁起よりあり

外此あり故に是より隨つて父母強き誓願を誓つてといふも從此をゆめ
患へり竟に荒川に入りて死す

六月朔日のみありて其靈を富士浅間と稱して一社に奉すといふこと
ゆれとも其説未詳

浅間淵 同所の河淵をさうとありて是を足立姫溺死の所ありといふ
十二天衆 足立姫の侍女の死骸を収めて十二天と稱し船方村の落守あり

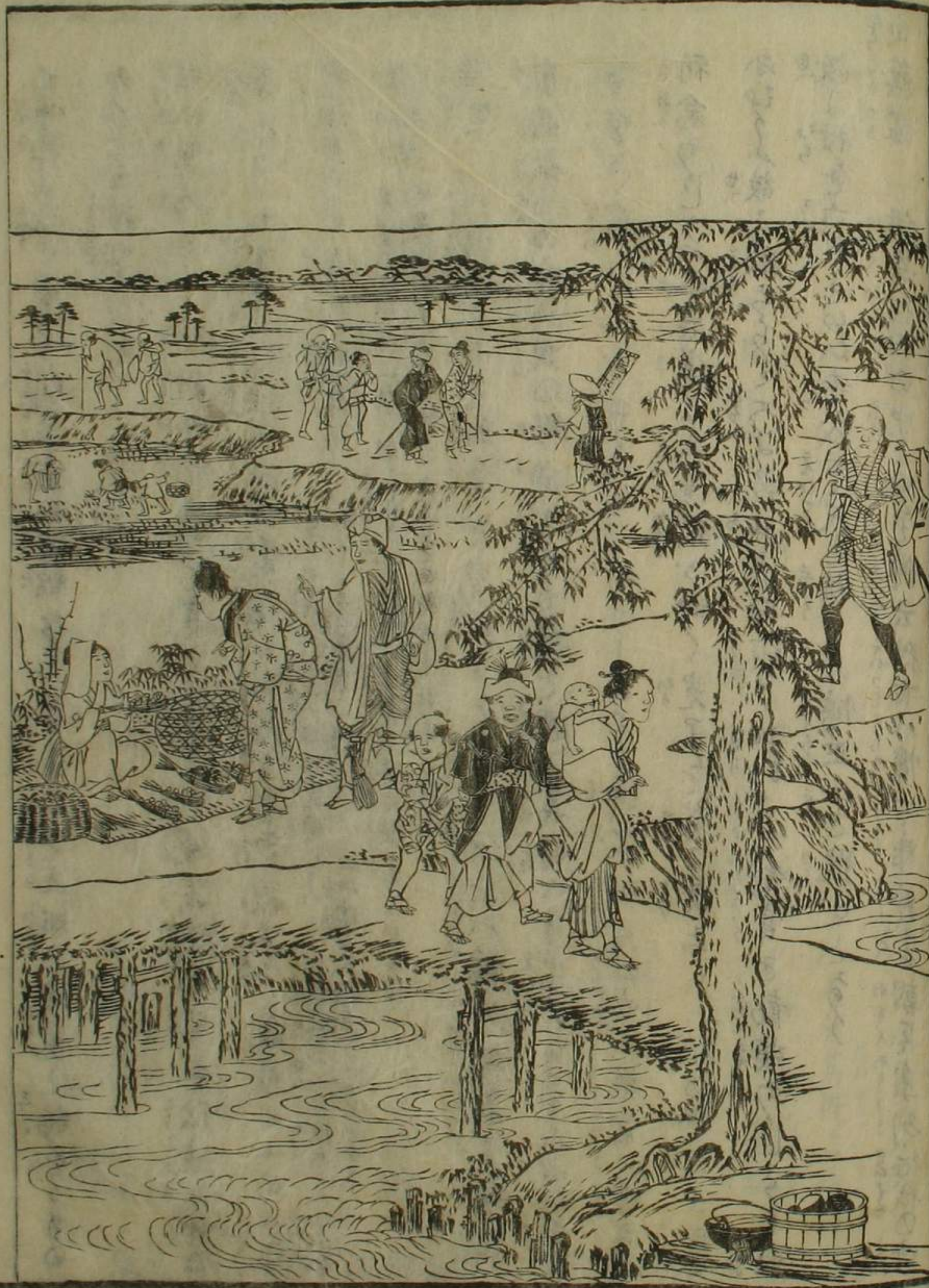
餘木阿弥陀如來 宮城村龍燈山住持寺に安を往右行基大士六辨の阿
弥陀如來の像を彫刻ありてその餘材を以て是を造るにす草堂の

中よ安置ありて遙く後明應の頃正善龍吞和尚改て一字の梵刹とほ



光茶銚
 千住の驛
 道の左側
 土人の昔老茶
 屋とも呼ぶ
 むろの茶
 銚の光澤の殊
 又勝なり
 重んずる
 あつかり
 此茶銚竟
 名物とあり
 其名
 世よ
 光る
 まのぬ





春秋二度の彼屋
 五の六阿弥陀廻と
 日わけの麗あるよ
 催され都下の貴様
 老るる若き打群は
 朝とく宅居を出ると
 夕とも行程まじりぬ
 遅くはる妻の月も
 長あしと秋の夕暮
 暮中

て此地に住しなり則此寺の屍祖たる當寺は足立姫の墳墓と稱する所の
あれとも詳ありと

五智山總持寺 西新井村にあり真言宗より遍照院と号し弘法大師の

草創より奉安弘法大師の靈像も同作る靈驗著く毎月廿一日あり

其儀ありて奉詣願母ほ或人云尚書弘法大師の靈像は其の北總真向山弘法寺に安置

阿伽井 幸堂の元の傍にあり則弘法大師の加持水なり法司服等を用る

八幡宮 六月村にあり別當を空天寺と号し傳云八幡左郎義家朝臣

奥羽征伐の時此國の野武士とも道を遮る其時六月空天より味方の

勢勇く戦むところ氣色もありしより義家朝臣公中鎌倉八幡宮を

祈念ありしり不思議大陽繞り如く光りて背を交われ敵の野武士亦日

小し故に眼くらを大に敗北し依り此地に八幡宮を勧請ありしと此

故に村を六月といひ寺は天と稱し又幡正山と號しとあり

白旗塚 伊奥村田の中にある傳云往古八幡左郎義家朝臣奥羽征伐の時

此地に白旗を建凱平を留しし此ありしと近頃此塚上は小祠あり

其傍に立寄りのありの崇あり故社荒廢しをりひりれとも其傍に再建し

せしりしと今塚ありを存す今も此塚の上は登るを禁む此辺の田面を白旗耕比と

いふ又覺塚と稱する所の五箇所あり首をばめしり呼と

萬徳山明王院 梅林寺と号し梅田村にあり新義の真言宗より奉尊し

比翁菩薩を安んず寺記云當院在基志右二郎先生義廣八幡左郎義家

の孫六條判官為義の三男あり始常陸國伊予に住し後同國志を村にあり

榎戸に一院を創基し祈願所とす是より先治承の頃頼朝初

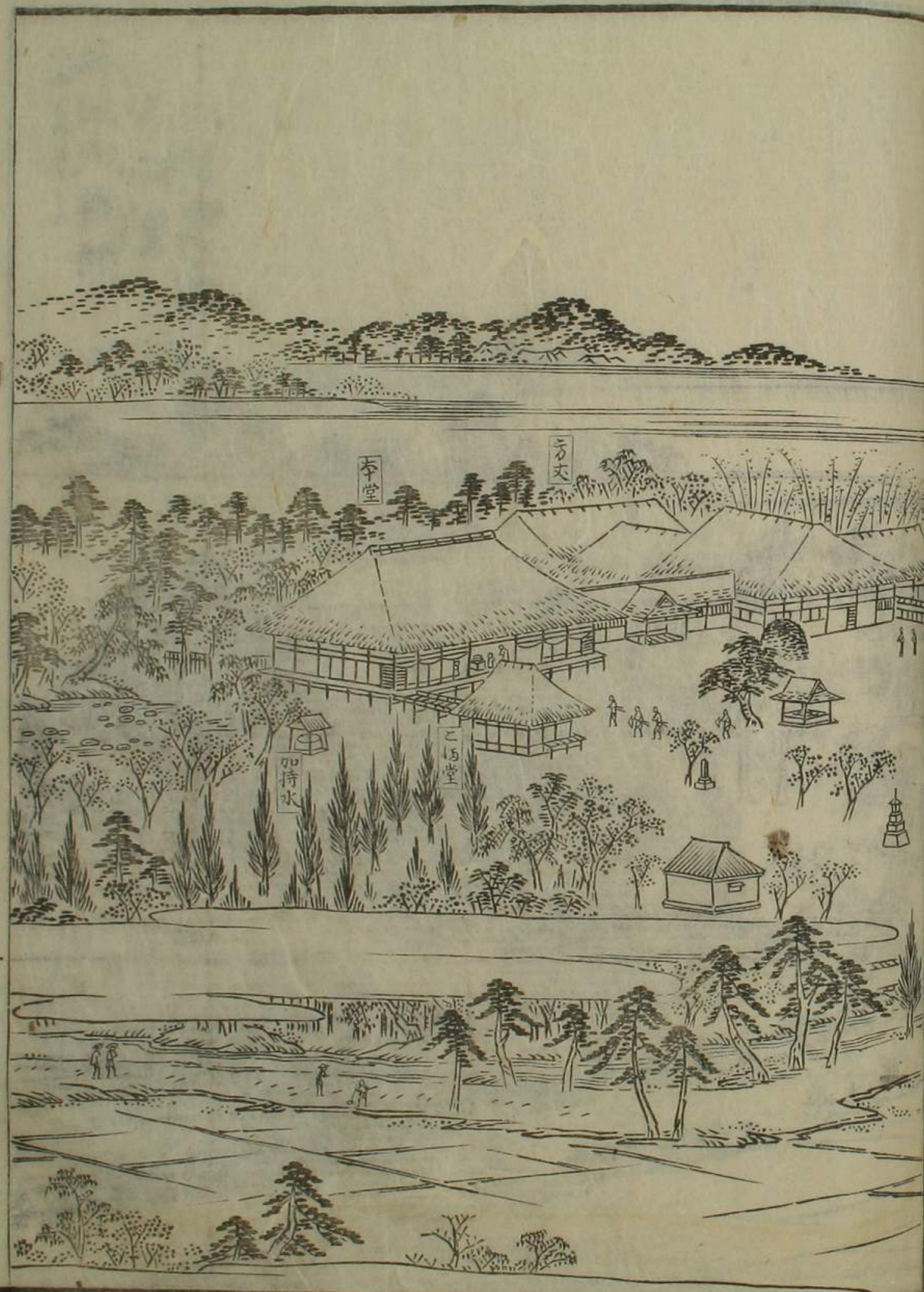
義兵を起すの時義廣自立の志あり故に頼朝に隨つと初小山小四郎朝

政が為に敗らる其後同左馬次義純の孫あり此梅田村に住し

其裔常陸久廣義純より當院の傍に始り天満宮

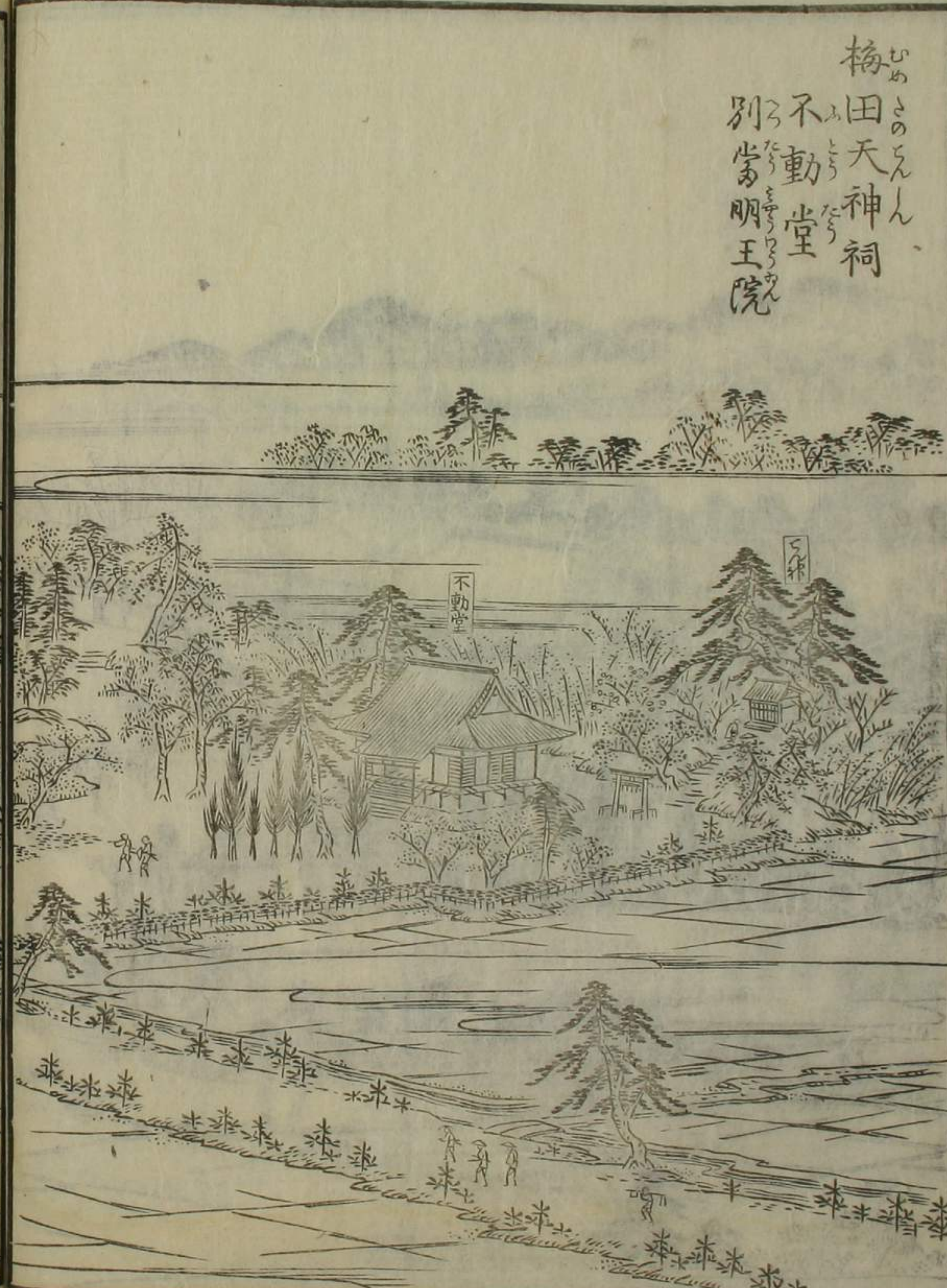
を勧請し鎮守とす又神告に仍姓を梅田と改め小方郎と号し又遠く後

永正年間東大に乱る同左郎左衛門久義小方郎久廣より十六代の孫同帯刀是を



西新井 しんせい
 大師堂 だいしだう
 毎月廿一日 まいげつにじゅういちにち
 忌 いみ





梅田天神祠
 不動堂
 別當明王院

厭ひ丹羽別嶋材城に移り住し又同國峯山城に移るはつとも遂に敵の
為に生害と
長子久頼を討つ久友
其後國民當院に亂入し遂に破壊を爲す
しを慶長の頃頼專坊
久義のいま
今の地は迂して寺院を再興し真知法印を
以て中興兵山とすと又寛永二十年の春
大樹
御放鷹のまきり立

不動堂
本堂右の方より本堂不動明王の弘法大師の作りて覺鑓上人根康傳法院草創あり頃
護摩堂の本堂より安直ありて天正三年故ありて麓路敷中山清保寺に移し奉り又寛保元年
不思儀の靈感ありて仍り
後、安直寺の安直可とあり

天満宮祠
不動堂の後の方小き丘の上なる古松の
正一位鷲大明神社
花亦村よりあり此地の産土神とて祭神詳らんと奉祀を釋

如來末よりて鷲を乗せる醉相あり別當の真言宗よりて正覺院と号と
毎第十一月兩月以て祭日とて縁起曰奉祀叙迎牟尼如來の新羅三郎

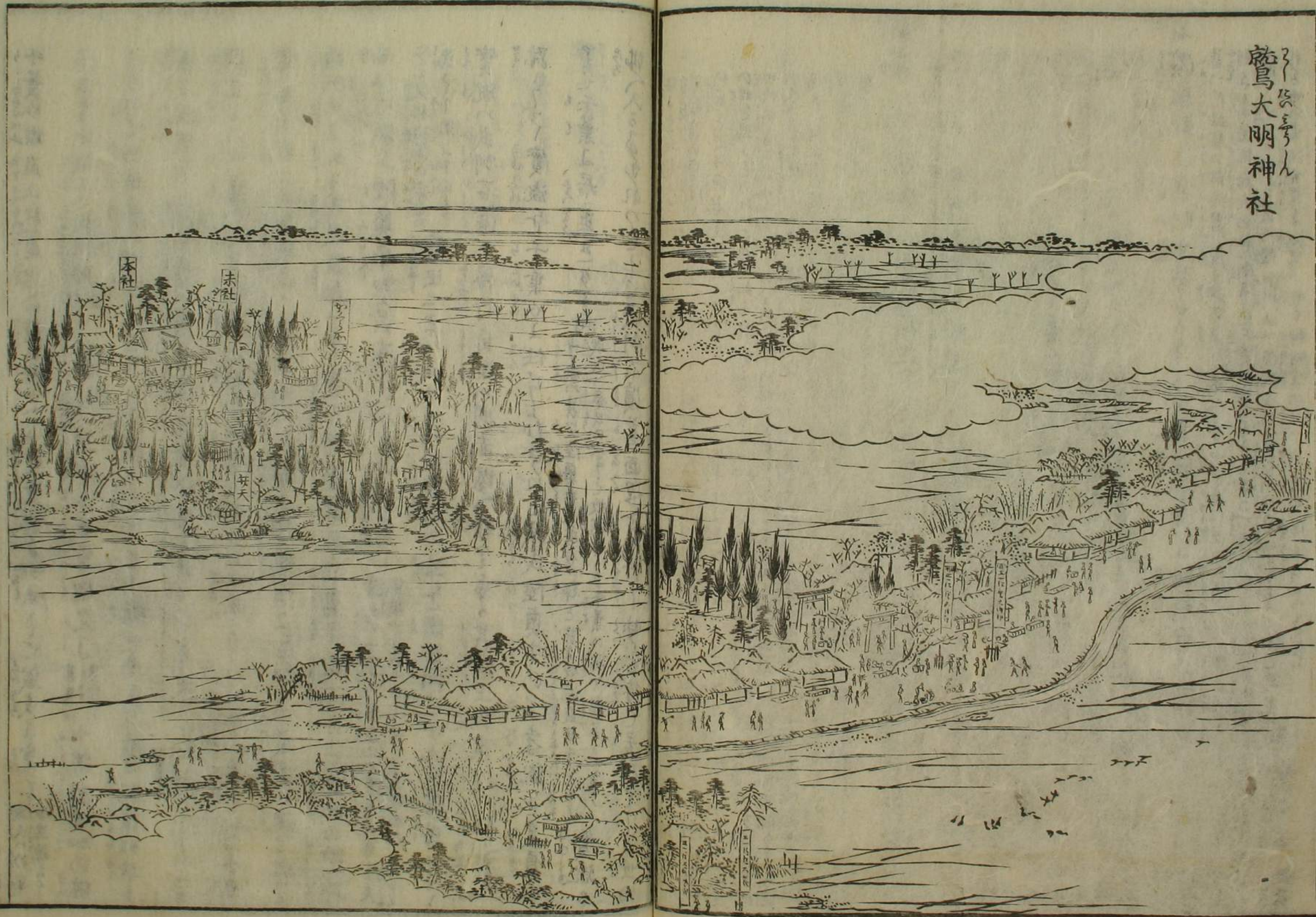
義光崇毅の靈像よりて天喜の昔奥羽女倍貞任叛送を企るの時奉るの
示現よりて其軍勝利ありし由を記すも其説詳らんと

石濱
今橋場といふ義経記に治承四年九月十一日
東鑑に頼朝隅田川を戦て云云國に
あへり右大將頼朝御下總國より武藏國へ打紙ありとある奉り石濱と申
処之に戸を郎り知行不ありと云
其後千葉家の所領とるを代々是を知行せり
茶の右文より田新六郎同大橋亮不領の中より千葉石濱の名を加へたり又本内宮内少輔石濱の今津
を領し或は倉下寺の領も附とる記すり寺の總泉すのま本内宮内少輔此を領すは石濱地止の
詩にほすひらあり

石濱城址
其地今ささりと事跡合考す神明宮の北の方ありとあり
善門院法蓮の浴隅田川窪の淵のふと奉る文中善門院在隅田川の勝の地中より云云善門院を
則ち善門院創立の地なりと云勝の地も又善門院の所領たりし小田原北条家の古文書に詳なり
之勝と云ふ地を荒川後津川の川流隅田川の合流川原の地なりと云ふ
代る時事跡合考す記す如く神明宮の北の方その地止ありと云

鎌倉大草紙云

鷺大明神社





竹の
紫の
らよも
一本
茶系
芭蕉

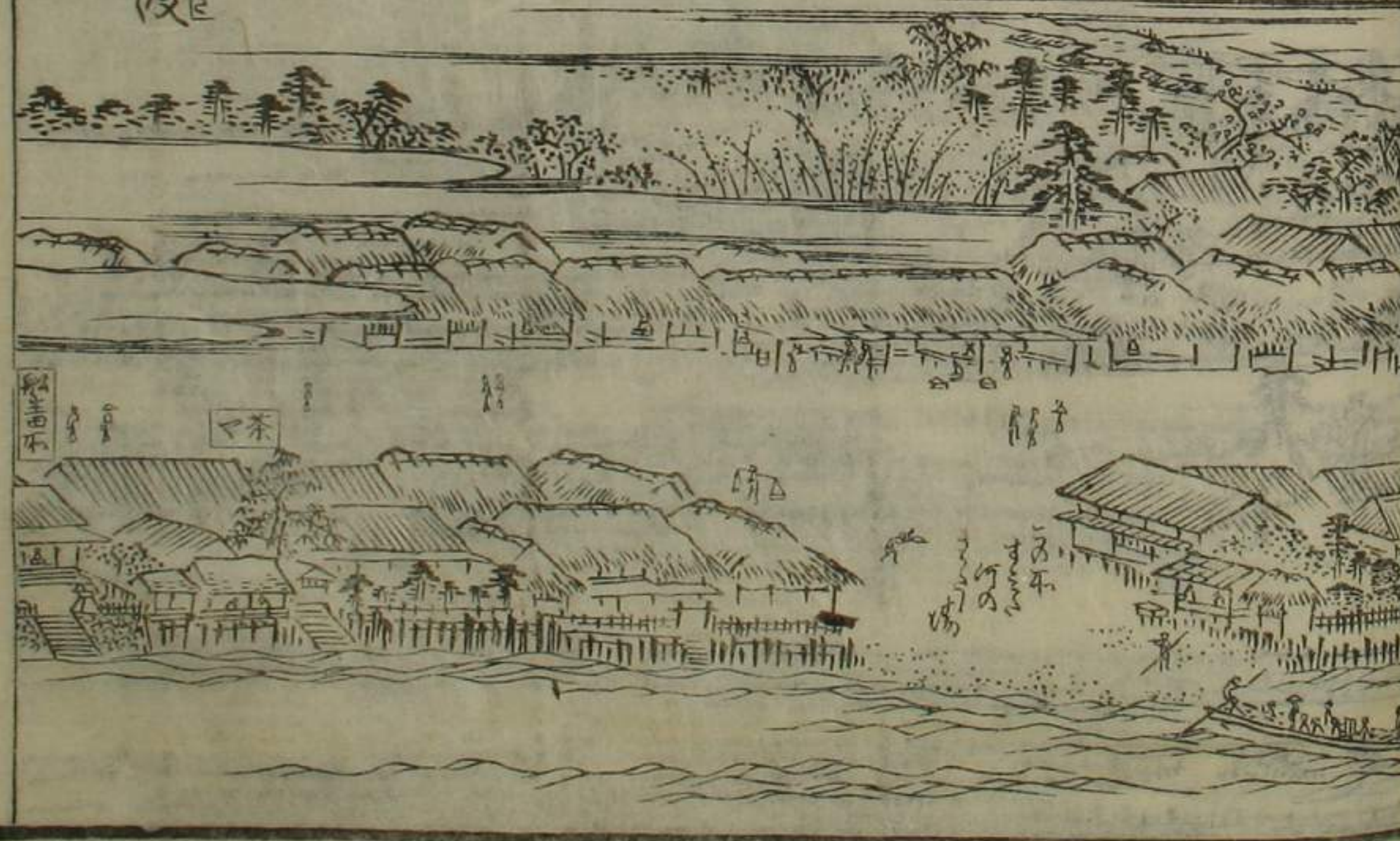


石濱
神明宮
隅田川西岸

うき旅の
まらよ
流るる
ありい
河
洞の
神や
水の
まみ
うみ
道真准后



思河
橋場渡



三其



總泉寺
大門

此
初
庄

總泉寺
不動
藥師



大方

殿

尾破

不動

鉢

鉢

鉢

鉢

沙芽の
 原の
 焼
 其角
 其角



其角の神社
 沙芽の原
 玉姫稲荷

其四

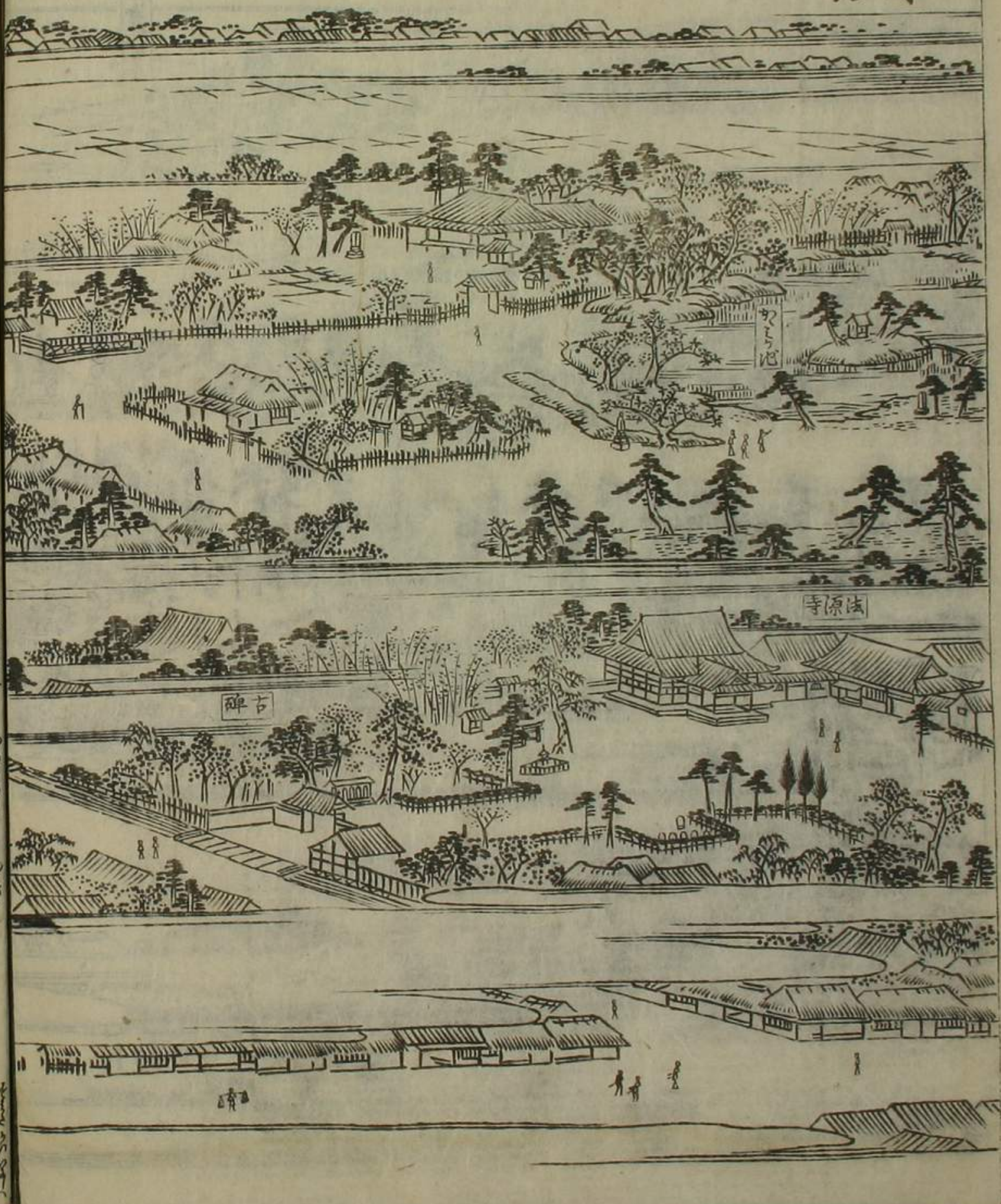


人々
 其角の
 霜を
 道與准后

其角
 其角

法源寺
鏡池

其五



依原神ありて仰られ本井隅田を打越て板橋より着ぬあり
隅田河に
海にけり

夫本抄
隅田河にけりといふ今こそその身を浮橋のある世ありて
光俊
斯記に記すといふ此井の康元元年鹿島社よりとてりよ前田川の渡をされ被りて今に浮橋を
つくりしをけりといふ又

梅 花無盡藏詩註云 隅田在武藏下總千葉構長橋三条云
傍小塚有柳道灌公為攻下總千葉構長橋三条云

朝日神明宮 橋場よわと石濱神めとも
神めとも号く祭神伊勢と同く内外両皇古神宮坂新まのる社傳云云
或信小橋場
今のりて橋より南の方盛船所のありて昔より一の橋場の向にありとて今に於て此の橋を
舟代の日まきとて名をけりといふと其橋の頂のりてと云依て昔は今のりて橋を
一所より川上神明宮の大門の通り其橋のりてと云依て昔は今のりて橋を
今に於て橋より南の方盛船所のありて昔より一の橋場の向にありとて今に於て此の橋を

人皇四十五代聖武天皇の御宇神龜元年甲子九月十一日鎮坐と云
牛頭天王社 奉社の左の方よりあり橋場の橋守りて祭礼の毎六月十九日を世に汐入の押合
祭りとて神樂今戸橋をりてとてりよ氏子の輩らとてりよ神樂早もする其神樂は

龍田河渡

名子

あけ

ひき

こゝ

官人

都鳥

家

あ

ひき

あけ

あ

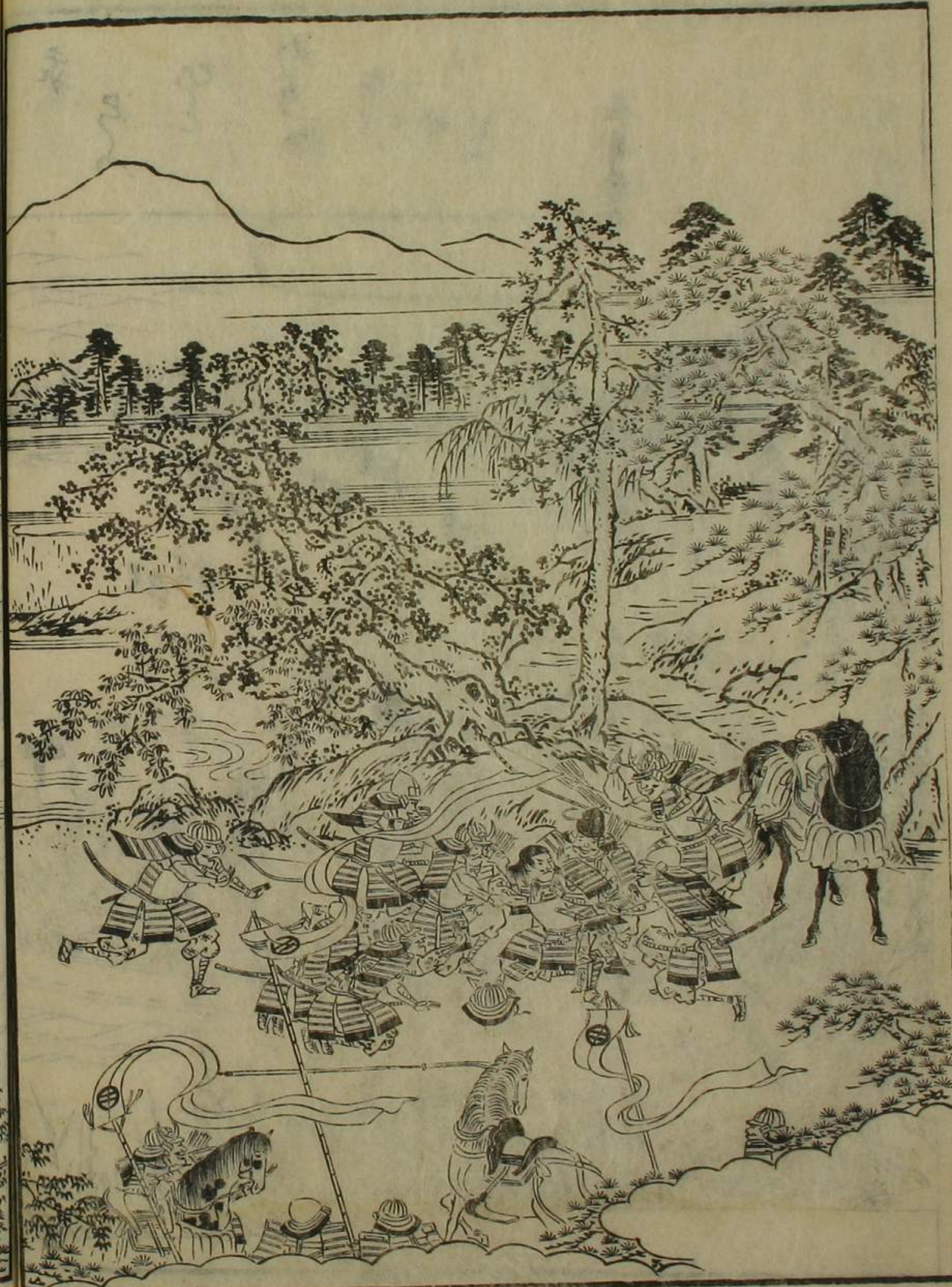
とや

在原業平

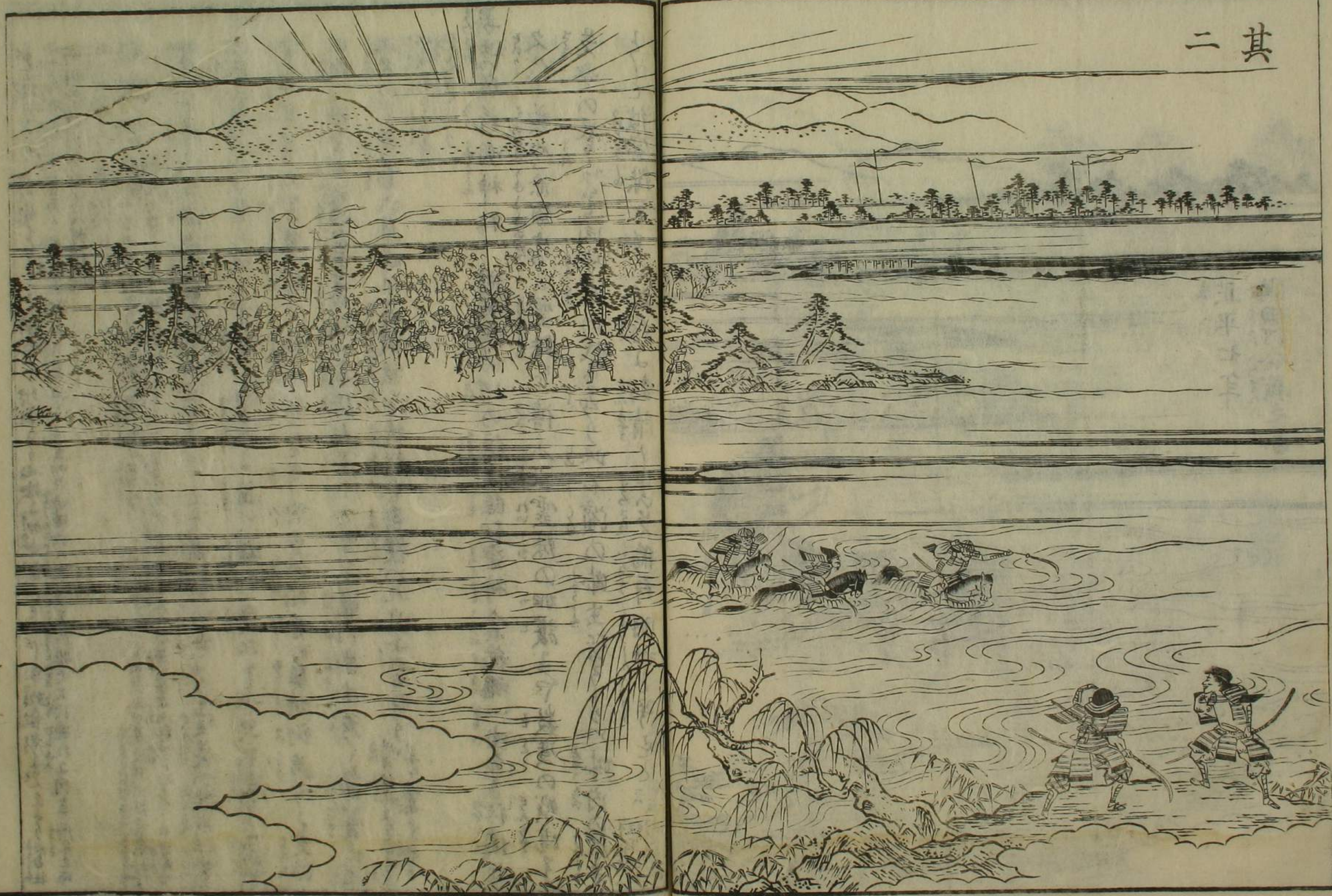


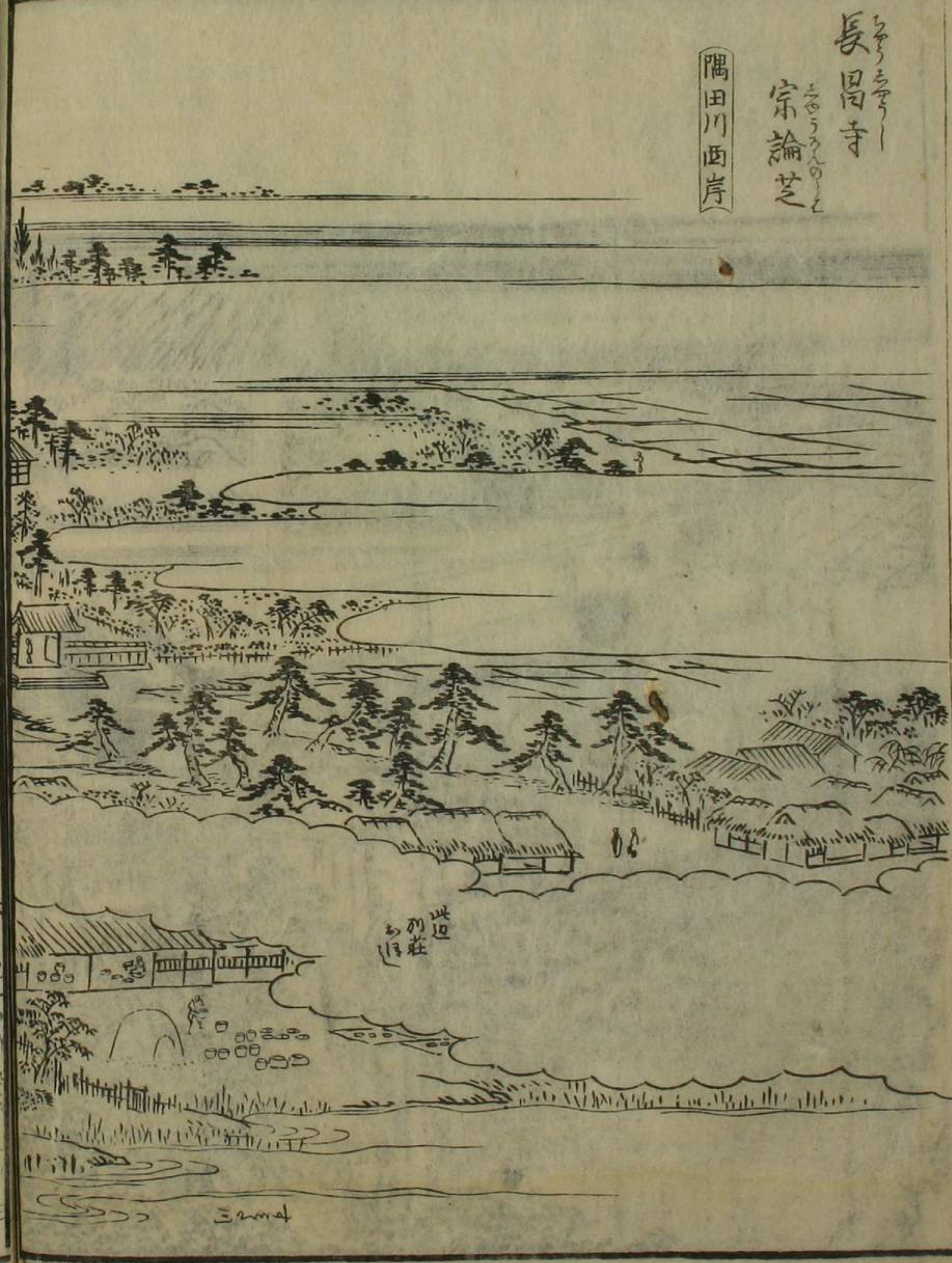


正平七年
隅田河合戦之景



其二





長閑寺
宗論堂
隅田川西岸

三二四

小戸別當の天台宗よりて松林院と号し祭禮ハ毎年八月十五日

放生會を後行す

社記曰源頼義朝臣義家公と共に勅を奉りて奥別安倍貞任宗任を誅戮

しゆり仍康平六年癸卯八月其祈願より鎌倉由比郷より小戸

比に至り石清水八幡宮を勧請あり今戸社記に今戸律に作る小戸原北条家の分限帳に

按じ律戸の通音あり本内宮内少輔牙領石清水八幡宮を勧請す其後奥別武衛宗衡兄弟叛逆の時も義家朝臣鎌倉鶴

岡より小戸社八幡宮等に祈願ありて賊徒を亡し勝利あり故永保元年

辛酉両社の後造を加へられ行基彫造の弥陀を双々の奉祀佛より又同作の

茶所をより慈覺の作の觀音等の像をも安置ありとあり其後文治五年

右大將頼朝公奥別の恭衛追討より進發の時も此御神より祈誓ありて勝利

を得ぬに建久元年庚戌下河辺庄同行平を奉行よりて宮社を重建あり然

小寛永十二年丙子 台命を奉り舟越伊豫守八木但馬守等是以司

王當社御再興ありより之降神光日々小新に靈威月々盛なり

今戸
八幡宮

隅田川西岸



今戸焼

此は野焼者
陶器通ありて
是を産業
と云ふ今戸焼
と稱す

元禄二年七月
三百四十四
然り

出さるるを
ゆらゆらと
ほらほら

今戸焼
下巻
秋風



靈龜山慶養寺

同く南の方今戸橋の北の結あり曹洞派の禪刹なり

元山を明山良察和尚といふ

の二字の願齋の筆れを辨財天社境内あり本寺の弘法大師唐より携来の

靈像ありといふ

真土山 今戸橋の南の結ありまて待乳を作す或信土を作る万葉集亦打

亦打山幕越行而廬前乃角太河原爾獨可毛將宿

今宵まて誰者ゆるん庵崎の隅田河系の秋の月ゆき

月影のさそや菴崎すそ竹紙まら山ゆきのゆき

誰よあゆむらむらむら山夕越行のあゆみゆき

ほほら山夕越行の風寒そそたのあゆみ鳥れくあり

のそ家そのゆきを東路のまらちのゆきゆき

昔の鳥越西福寺の隣あり後本不より

真土山を以ての北の結あり

伊丹左京丹波川采女といふ二人の壮士故ありて討果たり

草紙に詳なり

今宵まて誰者ゆるん庵崎の隅田河系の秋の月ゆき

月影のさそや菴崎すそ竹紙まら山ゆきのゆき

誰よあゆむらむらむら山夕越行のあゆみゆき

ほほら山夕越行の風寒そそたのあゆみ鳥れくあり

のそ家そのゆきを東路のまらちのゆきゆき

道安准后

須徳院

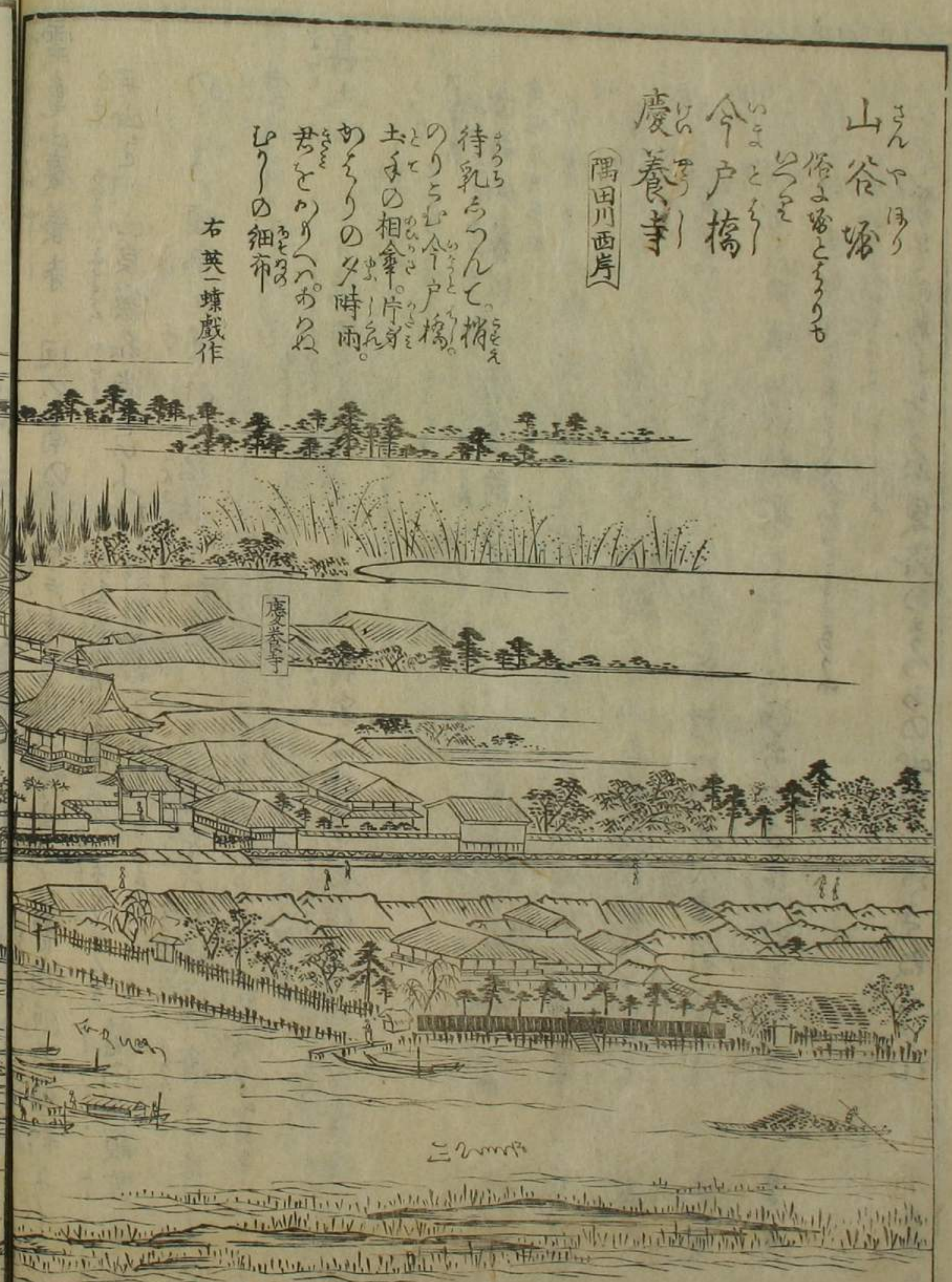
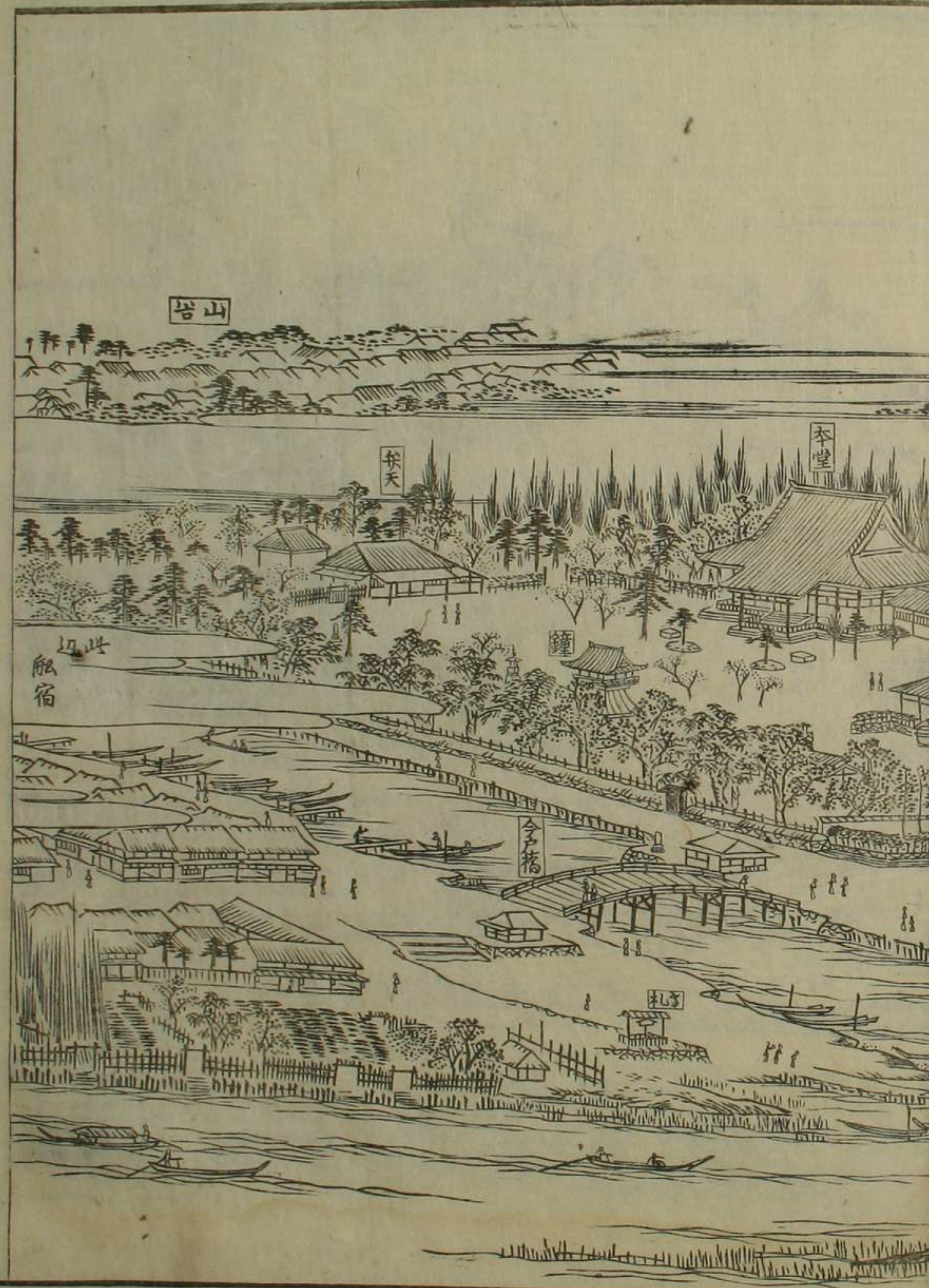
弁基

定實

季廣

家隆

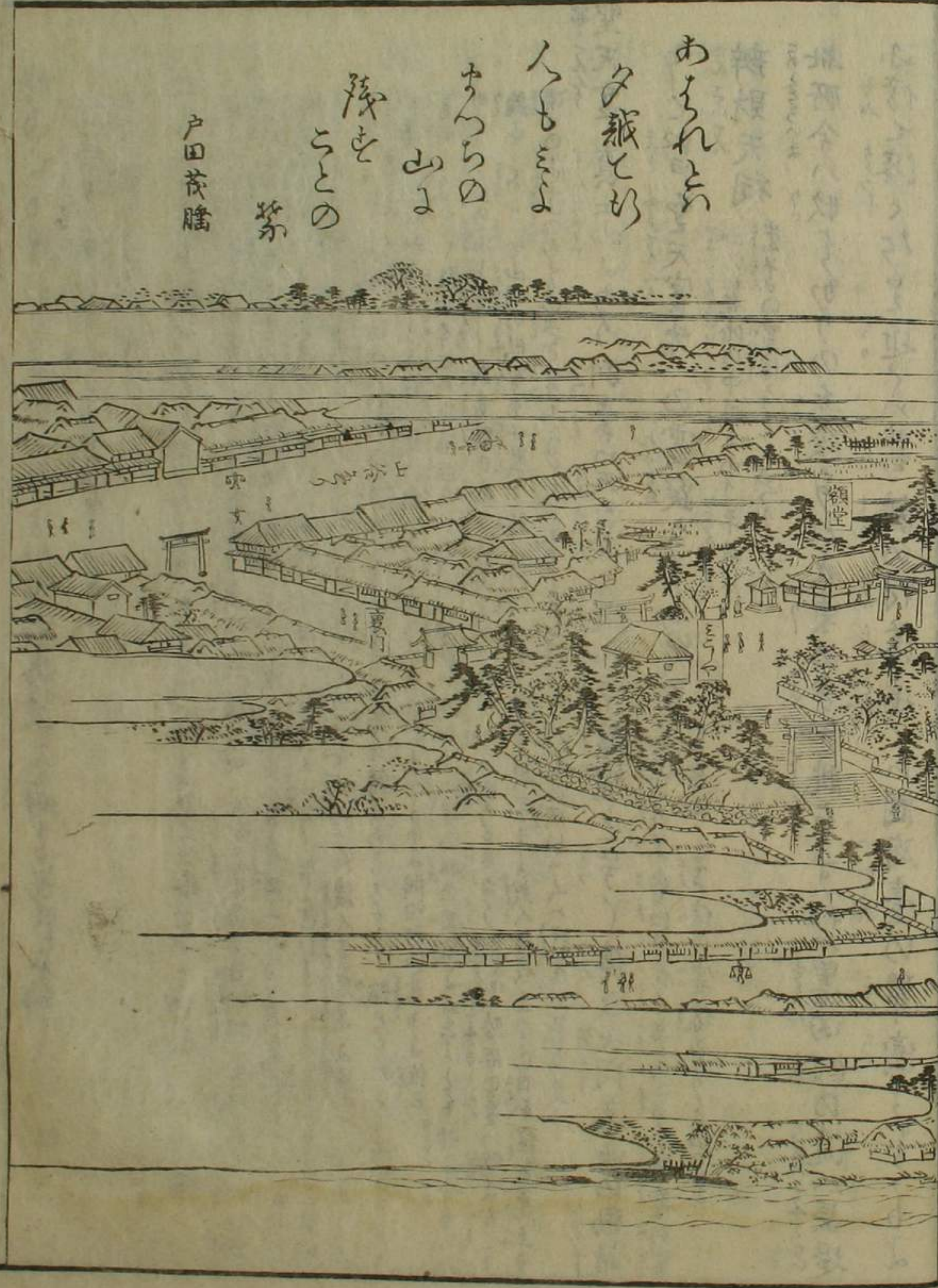
道安准后



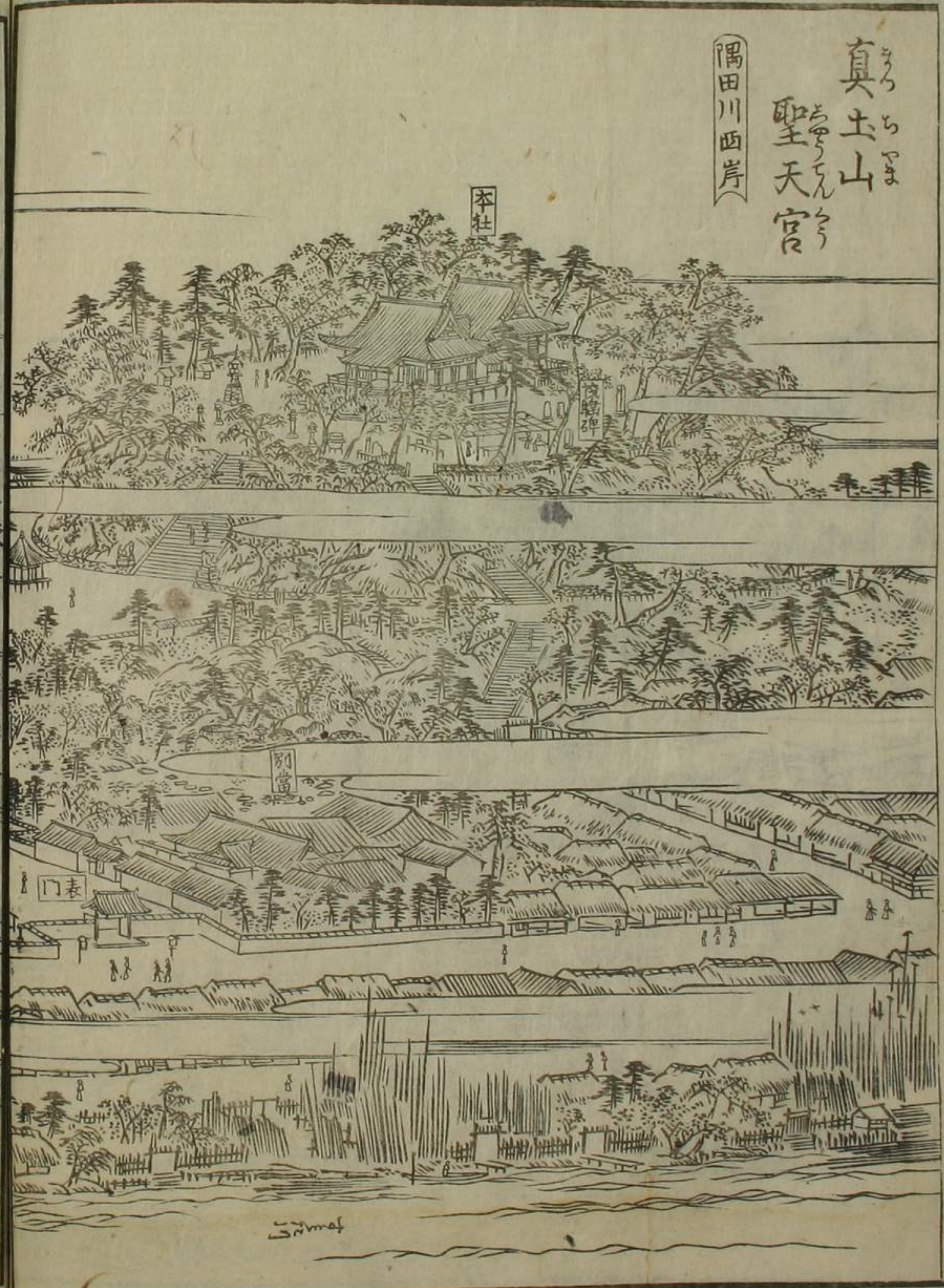
さんやほろ
 山谷 俗に留とすうりも
 今戸橋
 慶養寺
 (隅田川西岸)

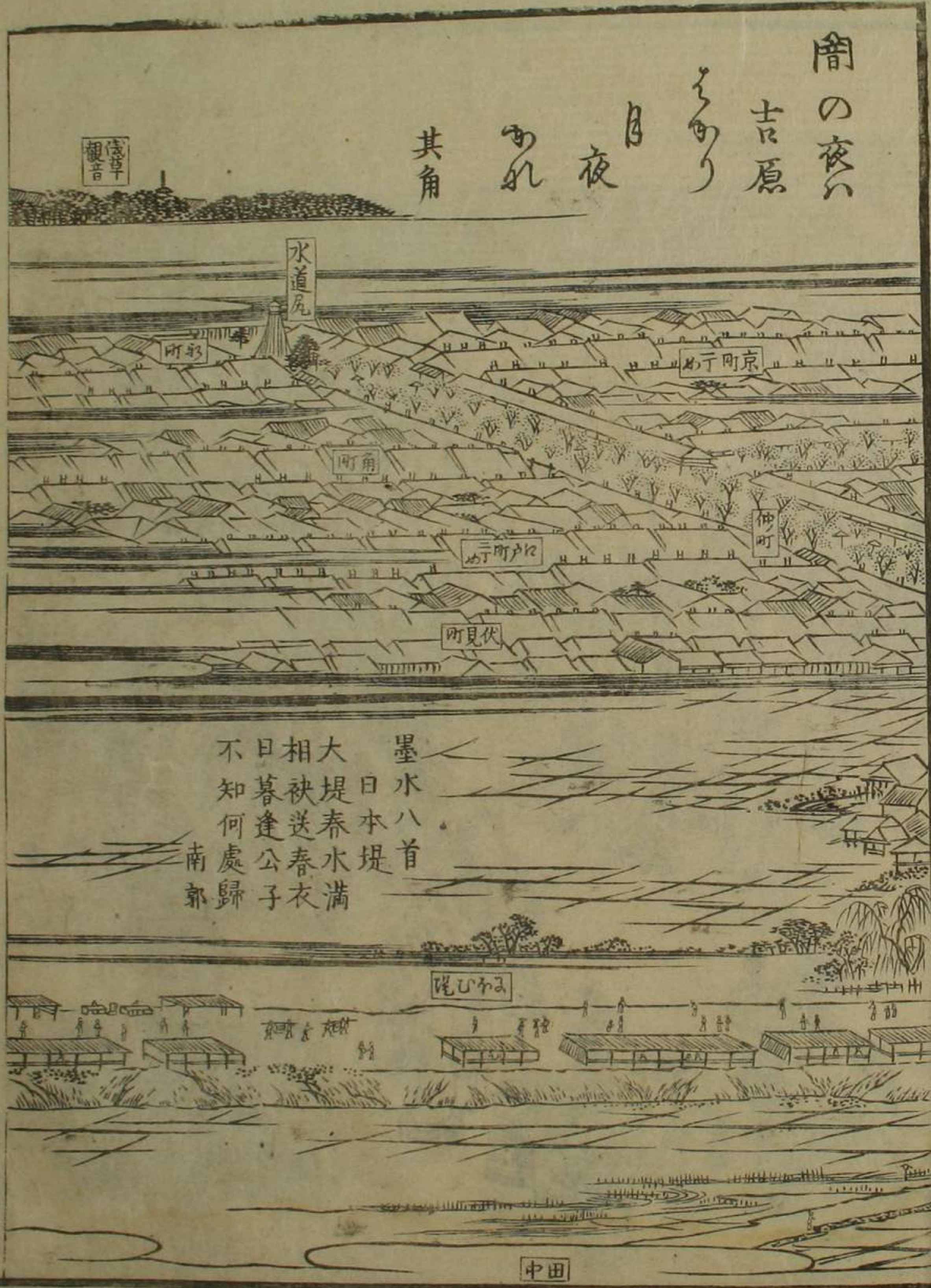
待乳らつんで、梢
 のりらむ今戸橋
 土手の相傘、片
 あそりの夕時雨
 君をのりへあね
 じりの細布
 右英一塚戲作

あまれと
夕飛と
人もと
かつら
山よ
後を
らこの
茶
戸田茂膳



真土山
聖天宮
隅田川西岸





南の夜

吉原

月

夜

其角

其角

遠草観音

水道尾

町新

町京

町角

町仲

町戸

町見伏

墨水八首
 日本堤
 大堤春水満
 相袂送春衣
 日暮逢公子
 不知何處歸
 南郭

堤山

中田



新吉原

上

新

町マ

町戸

町西

町合

町七

町大

高

町人



四方の地を賜ひ是より吉原町と号す
今所謂和泉町高砂町住吉町難波町等其地なり
あまのこしを賜ふ故に原と名けり
元禄元年の江戸参府の書より其始發別元吉原と号す
 落成を告げよ江府益繁昌一人家夢をなれ
明暦二年の冬竟く今この
所より習地を賜ふ
明暦三年丁酉
依て新吉原町と号す
此花柳のまこと
小三都の魁たる其賑の特殊生の花の頂をりて様なり
春宵一刻の價
千金を顧む初秋の燈籠の万字屋の玉菊の追福より
八朔の白重の
巴屋の高橋よ起る今も批目をりて更衣の節とを名け
此二度の月々の
全盛のいふもさらさらと悉く其美を舉ぐ
是を累と

江戸名所圖會開陽之卷終

